研究ノート

クィントゥス・トレベルリウス・ルフス
—ガリア・ナルボネンシスの初代属州祭司—

山　本　晴　樹

クィントゥス・トレベルリウス・ルフス（Quintus Trebellius Rufus）はローマ元老院属州ガリア・ナルボネンシスの初代属州祭司として知られているが、その祭司職への就任がいつの時期に当たるのかという問題は、必ずしも解決されているわけではない。ここでは、彼に関わる碑文（IGLS 623/624）を改めて検討することによって、この問題の解決の一助としたい。

Q. トレベルリウス・ルフスに関わるギリシア碑文は、彼の出身地トロサ（現トゥールーズ）からは遠く離れたアテネのアクロポリスで発見されている。当該碑文とその写真[1]を以下に掲げる。

ΗΕΞΑΡΕΙΟΥΠΑΓΟΥΒΟΥΛΗΚΑΙ
ΗΒΟΥΛΗΤΩΝΕΞΑΚΟΣΙΩΝ
ΚΑΙΟΛΗΜΟΣΟΑ[illegible]ΝΑΙΩΝ

ΚΟΙΝΤΟΝΤΡΕΒΕΛΛΙΟΝΡΟΥΦΟΝ
5 ΚΟΙΝΤΟΥΥΙΟΝΛΑΜΠΤΡΕΑΑΡΧΙ
ΕΡΕΑΠΡΩΤΟΝΕΠΑΡΧΕΙΑΣΤΗΣ
ΕΚΝΑΡΒΩΝΟΣΚΑΙΥΠΑΤΟΝΚΑΙ
ΝΕΙΝΗΝΣΙΝΙΕΡΩΝΔΗΜΟΥΡΩΜΑΙ
ΩΝΚΑΙΠΑΣΑΙΣΤΕΙΜΑΙΣΕΝΤΗ
10 ΠΑΤΡΙΔΙΤΟΛΩΣΗΤΕΤΕΙΜΗΜΕ
ΝΟΝΚΑΙΑΡΧΟΝΤΑΕΠΩΝΥΜΟΝ
ΕΝΑΘΗΝΑΙΣΚΑΙΙΕΡΕΑΔΡΟΥΣΟΥ
ΥΠΑΤΟΥΚΑΙΙΕΡΕΑΕΥΚΛΕΙΑΣΚΑΙ
ΕΥΝΟΜΙΑΣΔΙΑΒΙΟΥΚΑΙΧΡΥΣΟΦΟ
15 ΡΙΑΔΙΑΒΙΟΥΤΕΤΕΙΜΗΜΕΝΟΝΚΑΙ
ΨΗΦΙΣΜΑΤΙΑΝΑΘΕΣΕΩΣΑΝΔΡΙ
ΑΝΤΩΝΚΑΙΕΙΚΟΝΩΝΕΝΠΑΝΤΙΝ,
ΩΚΑΙΕΠΙΣΗΜΩΤΗΣΠ[illegible]///Γ[illegible]///[illegible]///
///ΠΩΜΕΓΑΛΟΨ
20 ///ΛΙΓΥΝΟΙΑΣ

Q. Trebellius Rufus の碑文

(D. Fishwick, I , 2 , Pl. XLV.)

このギリシア碑文を試訳すれば、以下のようになる。

「アレイオス・パゴス評議会、600人評議会およびアテナイ人たちの民会は、クィントゥスの息子、ラムプトレア区の人、クィントゥス・トレベルリウス・ルフス、属州ナルボネンシスの最初の属州祭司、ローマ市民団の神聖なるカエニナ祭祀の祭司長、全ての名誉でもって祖国トロサにおいて称賛されし者、そしてアテナイにおける名祖アルコン、ドルーススス祭祀の祭司、エウクレイアとエウノミアの終身の祭司、終身に亘って黄金の装飾品で称えられたる者(の姿)を、彫像および肖像として、全ての神殿とポリスの目立つ場所に奉献することを、決議によって(決定した)。自分たちに対する寛大さと勇気と厚意の故に。」

われわれはこの碑文から地中海世界の東西にまたがるQ. トレベルリウス・ルフスの経歴を知ることができる。それによれば、彼はまず西部において、元老院属州ガリア・ナルボネンシスの初代の属州祭司であり、ローマにおいてかつて滅びその後復興されたカエニナ祭祀の祭司長であり、そして故郷トロサ（現トゥールーズ）において全ての公職を務めた者であった。そして、東地中海のアテネにあっては、その市民として最高政務官である名祖アルコンであり、ティベリウス帝の弟ドルーススの死後（9年）に設けられた彼の祭祀の祭司であり、アテネの祭祀であるエウクレイア（名声）とエウノミア（秩序）の女神[2]の終身祭司であり、そしてローマ騎士の象徴を終身つける資格のある者であった。

M.ゲローも指摘しているように[3]、彼の経歴は西部でも東部でも、時代の新しいものから順に記されている。それを時代順に整理してみると以下のようになる。西部においては、まず故郷トロサで全ての公職を務め、その後ローマにおいてカエニナ祭祀の祭司長[4]になり、そして出身属州ナルボネンシスの初代属州祭司に抜擢された。その後東部のアテネにおいて, エウクレイアとエウノミアの女神の終身祭司になり、そして都市アテネにおける皇帝礼拝の一種ドルーススの祭祀の祭司を務め、最終的に名祖アルコンに就任している。

この中で、明確に時期が限定できるのはアテネの名祖アルコン職（84/85年から94/95年の間）である[5]。これはドミティアヌス帝の時期に当たる。とすればその他の役職はそれ以前に位置づけられることになり、上記の経歴の時間的経過を考慮して、ルフスの初代属州祭司の就任時期は従来ウェスパシアヌス期とされてきた。

これに対して、J.-M.パイエ（Pailler）は、ルフスの東西での経歴にはドミティアヌス帝の影響が大きかったとし、ガリア・ナルボネンシスの属州祭司は彼ドミティアヌスの時期に創設された、という説を打ち出した[6]。これと並んで、パイエは「属州ナルボネンシスの祭司法」（CIL XII, 6038）で欠落している皇帝名の箇所を damnatio memoriae（記憶の断罪）と解釈し、ウェスパシアヌスではなく、ドミティアヌスの名を読み込んでいる。そもそも彼は西部属州における属州皇帝礼拝の創設者をドミティアヌス帝とみなしているわけである[7]。

パイエ説は確かに斬新であるが、現時点ではガリア・ナルボネンシスにおける属州皇帝礼拝の開始をドミティアヌスに帰することには、筆者は留保したい。D.フィッシュウィックもパイエ説には慎重な姿勢を示している[8]。

ただ、ガリア・ナルボネンシスの属州祭司を列挙しているフィッシュウィックのリスト[9]を見てみると、地中海を股にかけたルフスの経歴はかなり特殊のように思われ、その点でパイエ説も一概

には否定しきれないところがあるように思われる。今後の皇帝礼拝研究の進展が待たれるところである[10]。

註

(1) 写真は西部属州におけるローマ皇帝礼拝研究を集大成したD.フィッシュウイック(Fishwick)が記載しているものである。Cf. Fishwick, D., *The Imperial Cult in the Latin West*, I, 2, Leiden / New York / Kopenhagen / Köln, 1987, Pl. XLV.

(2) パウサニアスによれば、この二女神はペルシア戦争でのマラトンの戦いの戦利品を奉献され、それ以来アテネ人に尊崇された。Cf. Pausanias, I, 14, 5(馬場恵二訳『ギリシア案内記』岩波文庫(上)74頁)

(3) Gayraud, M., *Narbonne antique, des origines à la fin du IIIe siècle*, Paris, 1981, 397-399.

(4) プローム(Pflaum)によればカエニナ祭祀の祭司職はローマ騎士によって担われたという。Pflaum, H.-G., *Les fastes de la province de Narbonnaise*, Paris, 1978, 103-105; Cf. Wissowa, G., *Religion und Kultus der Römer*, München, 1971, 520.

(5) ゲローは 90/91年説を提示している。なお Fishwick の挙げる Kapetanopoulos によれば 92/93年。Cf .Gayraud, *op. cit.*, 397 ; Fishwick, *op. cit*. III, 1, 105 n. 26.

(6) パイエは、ラブルース(Labrousse, M., *Toulouse antique des origines à l'établissement des Wisigoths,* Paris, 1968)以後のトゥールーズ古代史研究の集大成である著作でも同様の主張を繰り返している。Cf. Pailler, J.-M., dir., *Tolosa. Nouvelles recherches sur Toulouse et son territoire*, Rome, 2001, 296.

(7) Pailler, J.-M. Domitien, la《Loi des Narbonnais》et le culte impérial dans les provinces sénatoriales d'Occident, *RAN* 22 (1989), 171-189.

(8) Fishwick, III, 1, 99-111.

(9) Fishwick, III, 2, 183-185.

(10) それに関連してヘレニズム世界におけるローマ皇帝礼拝研究も注目される。以下の著作を参照。Kantiréa, Maria., *Les dieux et les dieux augustes*: *Le culte impérial en Grèce sous les Julio-Claudien et les Flaviens*, Paris, 2007, 84-87.なおカンティレアは、ルフスを属州ナルボネンシスの初代祭司ではなく大祭司(Grand-prêtre)としている。Cf. Kantiréa, *op. cit.*, 224 (no. 32).

(附言)ギリシア碑文の試訳に関しては、前野宏志氏(広島大学文学部)のご協力を得た。ここに謝意を表したい。

Quintus Trebellius Rufus
le premier flamine provincial en Narbonnaise

Q. Trebellius Rufus est connu en tant que le premier flamine provincial en Narbonnaise. Quand il etait nommé, cependant, c'est encore une question. D'apres les recherches de l'inscription greque (IGLS 623/624), ce serait au temps de l'impereur Vespasien. Mais récemment J.-M. Pailler a proposé la possibilité de l'empereur Domitien. Bien que sa thèse est charmante, pour le moment je ne peux pas être d'accord avec cette thèse, puisque elle n'est pas bien confirmée par les sources historiques. C'est vrai que la carrière interrégionale de Q. Trebellius Rufus dans le monde Méditerranéen est très curieuse en comparaison avec les autres flamines provinciaux en Narbonnaise. Donc on peut encore laisser le doute entre Vespasien et Domitien.

YAMAMOTO Haruki
Université de Beppu